

かささぎ通信 第131号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2023年 12月 8日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

二〇二三年十一月の「森三郎の作品を読む会」では、「鉦の音はチンカラリン」(『雪こんこんお寺の柿の木』1943.12)と「けんかの後」(『赤い鳥』一九三三年四月号所収作)を読みました。

『雪こんこんお寺の柿の木』の中の「鉦の音はチンカラリン」の登場人物は、足利光氏(みつうじ)というやんちゃな公達、田舎家に住む黄昏(たそがれ)というきれいな娘、古寺の小坊主、そこに毎晩出る東雲(しののめ)入道というお化けそしてお地蔵さまです。

この登場人物の光氏・黄昏・東雲という名前は柳亭種彦の『偽紫田舎源氏』(文政12・天保13年刊行)に出てきます。光氏・黄昏は紫式部の『源氏物語』の「夕顔」に登場する光源氏と夕顔に擬せられています。さらに『偽紫田舎源氏』を種本にした「田舎源氏露東雲」が浄瑠璃や歌舞伎として演じられてきました。森三郎の「鉦の音はチンカラリン」はこの「田舎源氏露東雲」に素材を取った童話という感じがします。

【あらすじ】光氏が一條戻り橋の辺りで落ちていたキンカンを拾おうとすると、鳶(とんび)が奪ってしまったので後を追いかけるうち、来たこともない田舎までやってきます。辺りの田舎家の十六七の娘黄昏に心惹かれた光氏は娘を奥方にしたくなり、二人で京まで帰ろうとします。途中日が暮れ、雪も降りだす中、路傍のお地蔵さまに泊めてくれる宿を聞き、しばらく行くと古寺にたどり着きました。小坊主が「毎晩、東雲入道というお化けが出ます」と言うのも構わず泊めて貰い、経櫃の中に隠れます。すると中に、この間盗まれた光氏の家の宝物の名刀小烏丸が隠されていました。光氏はその夜も出て来たお化けの東雲入道にその小烏丸を抜いて向かい、大きな古狸の正体を露わにさせ一太刀で退治します。夜が明けてから光氏・黄昏の二人は雪道の中、祝言を挙げるために京へ戻ります。

表題の「鉦の音はチンカラリン」は大入道登場の時の歌で、表題の「鉦」には「かあね」と振り仮名が付いており、表題からもリズムの良さを感じます。お地蔵さまに道を尋ね、教えられた通りに「あちや

らの道をこちやらへ三丁、こちやらの道をあちやらへ三丁」と光氏が歩く場面でも、舞台でも見るように動きが浮かんでいきます。

しかし森三郎の話は『田舎源氏露東雲』とはかなりの違いがあります。『田舎源氏…』では雨に濡れる二人がお地蔵さまの傘を雨具に借りるところを、三郎の話は雪の中のお地蔵さまに菅笠を被せてやっています。『田舎源氏…』の東雲・黄昏母子は非業の死を遂げますが、三郎の話はお地蔵さまの菅笠に雪がどっさり積もって花嫁さんの綿帽子のように見えたとき、光氏・黄昏を祝福して終わっています。このお地蔵さまには地蔵浄土や笠地蔵の昔話の要素が重なります。

当日の参加者から、森三郎は『田舎源氏…』の本を元にしたというより、それを理解する下地が子どもの頃から育まれていて童話に仕立てることができたのだろうという指摘がありました。森銃三・三郎兄弟は、芝居の好きな両親から話を聞いたり、刈谷の劇場にかかる芝居を見たりした経験があると言います。また刈谷の万燈に描かれる絵など日頃から歴史上の人物になじみがあったと想像されます。子どもの頃、村の劇場で村歌舞伎の上演を観た参加者の体験談なども話題になりました。話の発端の「鳶」は『雪こんこんお寺の柿の木』表題作でも小坊主が若君と交替するきっかけになっていたことや、「とべ」とんび、空高く」の唱歌(「とんび」葛原しげる詞、梁田貞曲『大正少年唱歌』昭和6)のことなど話題は尽きず、「大人が童話に触れる熱量」を感じたという感想もありました。この話は現在子どもたちが読む機会ほとんどありませんが、子どもの感想も聞きたい話です。

『赤い鳥』の「けんかの後」は仲良しの友だちとのふとした行き違いの後、謝ろうとしてもなかなか言い出せない少年の心の揺れを描いています(『かささぎ通信』29、84)。同じ号の「雪」は母に対する苛立ちを描いていたことも併せて、少年期の特徴をよく捉えています。

次回予定 二〇二四年一月十二日(金)午後一時半~三時半

・雉子(きこ)のお寺(『雪』「こんこんお寺の柿の木」1943.12)
・「パチン」(『赤い鳥』1933.5)